

詩を読む

今回の学習のポイント

- ① 詩の種類を理解する
- ② 詩の表現を味わう

詩の種類を理解する

今回の学習では、谷川俊太郎作「宝だから」という詩を取り上げますが、基本的な知識として、はじめに詩の種類について確認しておきましょう。

■ 詩の種類

- ① 使っている言葉による分類
 - 文語詩……昔の言葉（古語）で書かれている詩。
 - 口語詩……現代の言葉で書かれている詩。

- ② 形式による分類

● 定型詩……音数や語数などに一定のきまりのある詩
たとえば、五七調、七五調などで表されたもの（俳句〈五七五〉や短歌〈五七五七七〉なども含まれる）、漢詩の絶句（四句）や律詩（八句）などは定型詩と言えます。ほかに、西洋詩にみられる四行・四行・三行・三行で書かれた十四行詩（ソネット形式という）も定型詩です。

- 自由詩……音数などにきまりのない詩。
- 散文詩……行分けなどがなされず、普通の文章のように書かれた詩。

※①②の分類を組み合わせて、詩の種類を「文語定型詩」「文語自由詩」「口語定型詩」「口語自由詩」のように言います。

- ③ 内容による分類

- 叙情詩……作者の内面（感情）を表現した詩。
- 叙景詩……自然の風景、情景をありのままに表現した詩。
- 叙事詩……出来事、物事について表現した詩。英雄の伝説や史実をうたった韻文のこと。

国語監修・執筆

中澤 匠吾

詩の表現を味わう

「宝だから」は、第二十六回放送「文学史く谷川俊太郎く」で紹介されたカレンさん作「生きる宝 動く宝」という詩に対する、いわば「返詩」として谷川さんが作ったものです。

カレンさんの詩は、人間の自然な気持ちや何気ない日常の行為がどんなに素敵なことなのかを素直に語りかけてくるような作品で、その感情や行為が「宝もの」のようにかけがえのないものなのだということを伝える内容でした。この詩を受け、谷川さんは「人間」や「宝」を共通のキーワードとして、新しい作品を生み出しています。

果たしてどんな思いがうたわれているのでしょうか。その思いに迫る手がかり、ヒントとして、詩の言葉、表現をいくつかピックアップして作品を味わってみましょう。

宝だから

谷川俊太郎

ほんとに大事なものはあるだけでいい
ほんとに大切なヒトはいるだけでいい
何でも誰でもあることいることで始まっている

朝 空がある 曇っていても晴れていても
昼 友だちがいる 気が合っても合わなくても
夜 働く人がいる 君が夢を見ている間に

たまには人間やめてもいいんじゃないか
キノコになって森にいてみる
クラゲになって海にいてみる

コトバになって意味やめてみる
声になってアンナプルナを呼んでみる
自分にもどってぼんやりしてみる

生きてれば毎日毎時が宝だから
目も耳も口も鼻も手足も忙しい
シニカルな大爆笑も宝石みたいに輝いて

■タイトル

タイトルには、作者が伝えたいことが端的に表現されていることが多いです。この詩では、『宝』とはいったい何のことだろうか」という疑問を読み手に与えるものになっています。これがつかめれば、詩の主題に近づくことができそうです。

また、「宝だから」という表現には、「タカラ」「ダカラ」という同じ音の響きを重ねた言葉遊びのおもしろさも感じられます。

■表現技法

詩の構造上、意味上のまとまりを「連」といいます（文章でいえば「段落」のようなもの）。この詩は三行で一つの連が作られており、五連で構成されていますが、第一連から第四連まで、「対句」が多用されています。そのため、全体がとてもしずみカルになっています。

■内容

【第一連】

ほんとに大事なものはあるだけでいい
ほんとに大切なヒトはいるだけでいい

この詩のメッセージが集約されていると考えられます。つまり、ただそこに「あること」「いること」にこそ価値があるのだという思いです。通常、存在するものは何か働きや役割を持っていると考えますし、人間も生きる中にその意味、意義を見いだそうとするものです。しかし、本当に大切なことはそうではないのだという、作者独自の視点にハッとさせられます。

【第二連】

第一連を受けて、その内容を具体的に表しています。「どんな様子であっても空はそこにある」、「どんな関係であっても友だちという存在がいる」、「眠りについている間にも働く人はいる」、いずれも「あること」「いること」そのものを伝える内容です。

【第三連】

たまには人間やめてもいいんじゃないか

意味をもつ「人間」という立場から解放されてみては、という投げかけです。ということは、後に対比されている「キノコ」や「クラゲ」は、どんな存在として描かれているのでしょうか。番組で確かめてみましょう。

【第四連】

コトバになって意味やめてみる

「言葉」ではなく「コトバ」です。ここではカタカナ書きの意図として、単なる「音」を表していると考えられます。「意味を持つことから離れてみよう」ということを伝える表現として効果をうんでいます。

【第五連】

生きてれば毎日毎時が宝だから

ここでタイトルになっている「宝だから」という語句が、「宝」が何であるのかが示されています。生きているその日その時、そこに存在していることそのものが「宝」（＝大切なモノ）であり、第一連との関連が理解できると思います。最終行「く宝石みたいに輝いて」と、文末を終止せず余韻を残しているところにも工夫があります。その「宝」は今だけのものではない、現在進行形であり、未来にもずっとあり続けるというイメージを読み手は受け取ることができるのではないのでしょうか。

まとめ

詩を読んだとき、そこには読んだ人なりの感じ方、解釈が存在すると思います。感じる心、自由な感性は大切なものです。まずは素直に「感じて」みましょう。その一方で「作者の感動の中心はどんなことだろうか」「どんなメッセージが込められているのだろうか」ということを客観的に把握し、作者の描く詩の世界を共有することも学習として大切な試みです。そのために、詩の一字一句に向き合い、「なぜその言葉なのか」「なぜその表現なのか」をじっくりと考えてみましょう。また、さまざまな表現の工夫が、詩のイメージや内容を伝えるのにどんな効果があるのかをとらえるということも、作品鑑賞の視点の一つとして重要です。漠然と感ずることにとどまらず、語句や表現を読み味わうことを楽しんでみましょう。